

但馬牛産地における和子牛生産と酒造出稼ぎ

誌名	農林業問題研究
ISSN	03888525
著者	人見, 五郎
巻/号	24巻3号
掲載ページ	p. 144-152
発行年月	1988年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



<研究ノート>

但馬牛産地における和子牛 生産と酒造出稼ぎ

人見五郎

1. 本稿の課題と方法

本稿は従来あまり言及されることのなかった和子牛生産と兼業に関わる諸問題についての一考察である。内外の厳しい情勢下にあるわが国の牛肉生産において、安定供給のネックとなっている重要な要因として子牛生産部門の不安定性と高コスト性がしばしば指摘されてきた¹⁾。実際和子牛生産経営は多頭化、近代化が叫ばれてきたものの、依然その零細性を克服できておらず、1985年のセンサスにおいても全国平均でやっと1戸当り母牛頭数が3頭を越えたにすぎない。零細であるということは、和子牛部門が複合経営の1部門として位置付けられるか、農外兼業と複合する形で営まれていると考えられる。実際85年センサスにおいても和子牛生産農家の8割以上がなんらかの兼業を行っている。

本稿はこの点に注目し、和子牛生産経営の零細性が古くから農外兼業との関係において維持されてきたメカニズムを、和子牛生産の技術的特性との関連において解明することを課題とする。まず和子牛生産と兼業との関係を論じるうえで、以下の2点に注目したい。第一は和子牛生産の立地特性である。和子牛産地は、有利な商品作目の導入が困難であった中山間地帯等、いわゆる「農業の限界地」で形成されてきた²⁾。これらの地域は同時に、農家にとって通勤可能な地域労働市場の展開をも困難にしてきた地域でもあったと指摘しうる。それ故にそのような地域の農外兼業は、多くの地域で一般的な、恒常的勤務を中心とした通勤兼業とはかなり性格が異なったものとなる。第二は兼業との関係を規定する和子牛生産の技術的特質である。日常的な飼養管理労働とともに、家畜の生理状態に対応した臨機応変な飼養管理労働が必要な場合も多々ある。また和子牛生産に必要な労働は飼養形態によって

も異なり、例えば飼料基盤が牧野依存か野草依存か、飼料作を行っているかなどによって異なってくる³⁾。それ故和子牛生産と兼業との結び付きは、稲作における兼業とは自ずと性格の異なったものとなる。これまで兼業問題を扱った研究は数多くなされてきているが、田代洋一氏が指摘しているように、多くの研究が稲作経営農家における兼業問題を扱っており、他の部門における研究はほとんどなされていないのが現状である⁴⁾。

本稿においては上記の2つの点に留意しつつ、伝統的の和子牛産地の典型事例の一つと位置付けることのできる、兵庫県美方郡温泉町を分析対象事例とし、まず次項で温泉町における和子牛生産と農外労働市場の特徴及び展開過程を明らかにし、ついで両者の相互規定関係を概観する。さらに第三項では、和子牛生産経営の農家経済における位置付けと、経営目標、飼養管理労働の担い手と作業の実際が、飼養頭数規模及び兼業形態との関連においてどの様に異なるかを分析し、飼養頭数規模別にその特徴を明らかにする。

2. 温泉町における和子牛生産と兼業

(1) 但馬牛生産の特徴

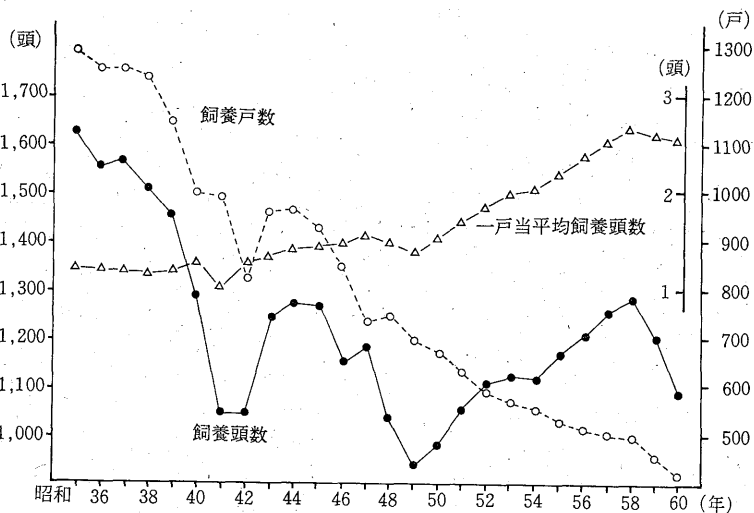
但馬牛の主産地である温泉町は、兵庫県北部の山間部に位置する。表1が温泉町の農業概況である。1戸当りの平均経営耕地面積は50aと零細で、しかも耕地の大部分は急な山間斜面に作られた棚田である。また山陰の標高300~400mの山間部は気象条件が厳しく、冬期間は積雪のため屋外労働がほとんど不可能となる。温泉町の農業は米と和子牛が中心で、このふたつ

表1 温泉町農業の概況

総農家数	1,374戸
専業農家率	6.6%
(老人専業農家率)	4.1%
第1種兼業農家率	19.8%
第2種兼業農家率	73.6%
1戸当り経営耕地面積	49.9a
水田率	79.8%
和牛飼養農家数	430戸
和牛飼養頭数	1,316頭
農業粗生産額に占める米の割合	45.2%*
同和牛の割合	24.6%*
耕地10a当り生産農業所得	4,600円*
(同都府県平均)	9,000円*

注) 1985年農業センサス兵庫県、*印は昭和61年「生産農業所得統計」農林水産省統計情報部より作成。

図1 和牛飼養頭数、飼養戸数および1戸当たり平均飼養頭数の年次推移



注) 温泉町役場資料より作成。

で総生産額の7割を占めている。

温泉町の和子牛生産は、図1で示されるように飼養戸数は年々減少を続けている。飼養頭数は昭和49年まで減少を続けたが、その後子牛価格の好調を反映して58年まで増加している。この期間は多頭化が進展した時期である。飼養規模は平均で2.6頭で、これを規模別でみると1~2頭飼養農家が総飼養農家の72.0%を占めるが、3~9頭層が24.3%形成されており、また10頭以上飼養する農家も14戸(3.7%)存在している⁵⁾。

温泉町の和子牛生産の特徴は、中国地方に共通な稲わら、野草への依存度が非常に高いことと、極めて労働集約的な飼養管理にある。野草の利用は、入会牧野が衰退した現在、主に水田の畦畔野草が中心である。棚田であるため畦畔面積は水田面積と同程度といわれ、また畦畔野草の採草は水田管理の面からも必要な作業である。多くの農家は、この畦畔野草と稲わらでこれまでも1~2頭程度の牛ならば十分飼養できたのである。これが零細飼養農家存続のひとつの要因と見てよい。しかし多頭化をはかる上では、零細な経営耕地と急傾斜の棚田は粗飼料基盤の拡大と効率的な粗飼料生産の展開を大きく阻害している。

但馬牛の優良子牛は、繁殖用素牛として取引されている。最高級のもは1頭百万円以上になり、そういった子牛を出すことを農家は誇りとしている。優良子牛は血統もさることながら、出荷時までの飼養管理のあり方が価格に大きな影響を与え、そのための飼養管

理はきわめて労働集約的であり、かつ高度な熟練を要する。また但馬牛は古くから季節交配を行っており、積雪をさけて春先に分娩させ、野草の豊富な季節に子牛を育成し、積雪の前に出荷するという形態をとってきた。このため野草採草、引き運動をはじめとした多くの労働が夏期に集中する。逆に冬期の重要な作業は分娩時の作業と哺育育成ぐらいで、他は毎日の給餌程度となる。つまり、夏期に十分な労働力が確保されるか否かが、和子牛生産経営の基本的条件となるのである。

(2) 酒造出稼ぎと恒常的通勤兼業

但馬地方での農外兼業を特徴づけるものに、但馬杜氏として知られる冬期の酒造出稼ぎがある。

昭和9年の但馬地方の季節出稼ぎの状況を表2で見ると、美方郡の出稼ぎ者が他の4郡に比べ圧倒的に多いことがわかる。しかもこの出稼ぎは、全出稼ぎ者の9割以上が酒造業と凍豆腐製造業によって占められている⁶⁾。

このような出稼ぎを余儀なくさせた要因を、当時の研究⁷⁾を参照しつつ挙ると、1)先にも述べた山陰山間部の過酷な気候条件のため、有利な商品作物の導入が困難であったこと。2)耕地面積が零細な上に、当時山間傾斜地には焼畑が多く、土地生産力が非常に低かったこと。当時の美方郡の11町村のうち照来村を除く10町村までが、飯米の自給すら困難な状態にあり、農外所得を求めざるを得なかったこと。3)美方郡では野外活動の困難な冬期に、農家余剰労働力を活用しう

表2 但馬地方における戦前の季節出稼ぎの状況 (昭和9年)

郡・町村	総農家数(戸)	季節出稼者数(人)			季節出稼者数 総農家数
		計	男	女	
城崎郡	9,369	1,955	1,292	633	0.21
出石郡	3,582	492	382	47	0.12
養父郡	7,209	1,988	1,477	511	0.28
朝来郡	4,122	933	747	186	0.23
美方郡	6,359	6,358	5,760	598	1.00
村岡町	507	699	699	0	1.38
浜坂町	320	190	122	68	0.59
兎塚村	539	1,078	1,045	33	2.00
熊次村	392	432	290	142	1.10
小代村	763	798	790	8	1.05
射添村	886	755	755	0	0.85
温泉町	677	1,712	1,526	186	2.53
照来村	547	655	494	161	1.20
西浜村	427	59	59	0	0.14

注) 大阪地方職業紹介事務局「管内労働事情調査」昭和9年「兵庫県統計書」昭和9年より作成。

る農村工業が域内に発達しなかったこと。同じ但馬地方であっても、城崎郡高田村のように柳細工の行われたところでは出稼ぎ者を見ない。

このように、当時但馬の村々のおかれた状況はきわめて厳しく、「出稼ぎに出ない青年は一人前の男ではない」「杜氏に出世することは家格を上げる」といわれ、競って出稼ぎに出ていったのである⁸⁾。この季節出稼ぎは他の多くの出稼ぎ地帯と同様に「単純な冬季遊休労働力の活用というだけでなく、農家経済の不安定性にこそ季節出稼ぎの基本的な要因がある」⁹⁾とすることができる。

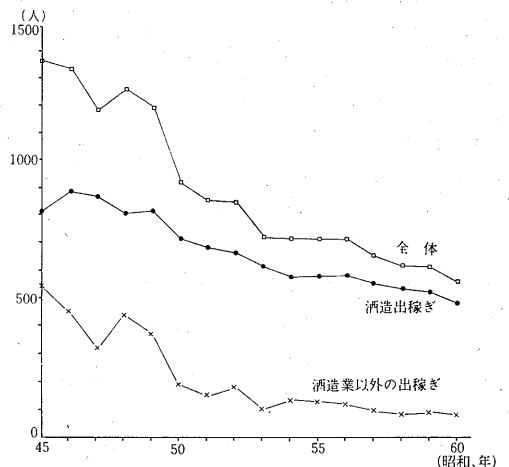
冬期酒造出稼ぎは、酒造業の特殊性から他の一般的な出稼ぎとはかなり異なった性格を有している。まず、わが国の酒造業は伝統的な在来産業であり、大手の酒造業とともに家業的な零細企業が数多く存在している。その醸造形態は、大手資本の四季醸造を除いて、「寒づくり」と呼ばれる冬期間の仕込が今だに一般的である。またその醸造過程は、伝統的な手工業的技術にもとづいており、長年の経験とカンに支えられた高度な熟練労働力を必要とする。この労働力が、杜氏を頂点とした職能組織化された酒造出稼ぎグループである¹⁰⁾。これらの酒造業の零細性、作業の季節性、技術的特質、杜氏制度のもとでの特殊な雇用関係により、その経営体質は依然前近代の性格を残している¹¹⁾。

次に、高度経済成長期を経て温泉町の出稼ぎがどの様に変化してきたのかを見てみる。図2は昭和45年以

降の出稼ぎ者の推移を見たものである。全体として出稼ぎは減少傾向にある。ただ酒造業以外の出稼ぎの急激な減少(昭和45年から10年間の減少率75.1%)に比べると、酒造出稼ぎの減少は比較的緩やかである(同減少率28.9%)。

出稼ぎの減少は、長期間家を留守にする出稼ぎが一般的に敬遠されてきたこと、農家後継者の域外流出が進んだことのほか、通勤可能圏内での恒常的兼業機会が増大したことがあげられる。温泉町の地域労働市場の形成をみてみると、昭和61年の温泉町の総事業所数534、従業者数は3,343名で雇用機会の増大は認められるものの、湯村温泉関連のサービス業、小売業が中心である。これらで事業所数324、従業者数1,722名を占め、うち961名が女性従業者となっている。また縫製工場などの製造業は事業所数69、従業者数692名でこれも女性従業者が513名を占めている¹²⁾。このように地域労働市場は主に女性に対して開かれており、現在のところ城内事業所は積極的に青壮年男子労働力を吸引するものとはなっていない。しかしここで注目したい点は、昭和50年代以降山間集落に通ずる道路の舗装化が急速に進められ、同時に冬期の除雪作業が行われるようになったことである¹³⁾。これによって浜坂町、鳥取市へのマイカー通勤も可能になった。その結果、表3に示したように50年代以降恒常的兼業の比率が増加することとなる。つまり地域内の労働市場は必ずしも男子労働力を積極的に吸引するものではなかったが、道路事情の改善によって通勤圏が広がり、男子労働力の農外兼業機会が増大したのである。

図2 温泉町における冬期出稼ぎ者の年次推移



注) 温泉町役場資料より作成。

表3 温泉町の専業別農家数割合の推移

(%)

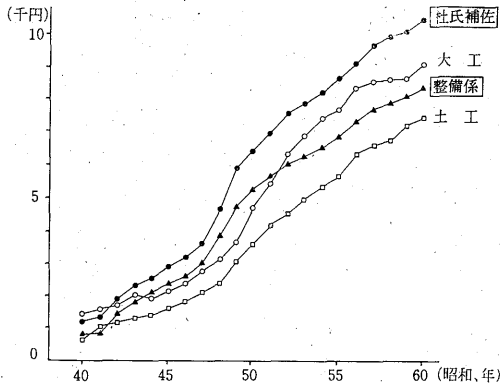
年	総農家数 (戸)	専業	第 I 種 兼 業				第 II 種 兼 業					
			計	恒常的	出稼	日雇	自営	計	恒常的	出稼	日雇	自営
1960	1,809	10.6	50.7	2.2	34.6	6.5	7.4	38.7	12.2	2.2	8.0	15.0
1970	1,602	4.7	49.9	5.7	38.9	3.1	2.3	45.4	16.4	16.7	3.6	8.7
1975	1,473	4.2	24.5	3.0	17.6	2.0	1.9	71.3	27.2	27.5	8.0	8.6
1980	1,422	5.5	19.3	3.2	12.4	3.0	0.8	75.2	34.2	21.7	10.4	8.9
1985	1,374	6.6	18.6	3.4	12.2	2.9	1.2	65.6	39.0	17.1	9.5	8.0

注) 「農業センサス兵庫県」農林水産省、各年次より作成。

このように兼業機会が増大し、恒常的兼業農家の比率も増大したが、依然3割の農家が出稼ぎ兼業農家である。これは壮年層の男子労働力に恒常的兼業機会が十分にもたらされなかったことと、所得面で酒造出稼ぎがかなり魅力的であったことによる。図3で酒造出稼ぎの賃金水準がどの様に推移してきたかを土木建築関係との比較でみると、酒造業務のうちもっとも賃金が低い整備係においても、昭和51年までは大工よりも高い賃金を実現している。さらに土工と比べると、40年代後半から日当で1500円以上の差がでていることがわかる。

酒造出稼ぎによって、一冬にどれほどの所得を得るのかは、職種、期間によってかなりの差があるが、但馬杜氏組合によると杜氏補佐以下の一般従業員で100万~150万円、杜氏で150万~250万円程度であるという。このため長期間家を留守にする出稼ぎではあるが、酒造労働の技術的蓄積を持つ壮年層以上の出稼ぎ

図3 酒造出稼ぎおよび土木建築関係の日当の推移



注1. 酒造関係は「灘五郷季節従業員賃金協定表」丹波杜氏組合、昭和40年~60年、土木関係は「建設・輸送関係業の賃金実態(鳥取県)」労働大臣官房労働統計調査部、昭和40年~60年により作成。但馬杜氏組合は丹波杜氏組合の賃金協定に準じている。
 2. 図中、杜氏補佐と整備係が酒造出稼ぎを示す。両者が協定賃金の最高および最低賃金となっている。

者は所得面でも地域労働市場に組み込まれにくいのである。

出稼ぎ型兼業も通勤型兼業も、ともに農外賃労働であるが、農業との関わりにおいて両者は根本的な差異をもつ。すなわち冬期出稼ぎは農閑期の余剰労働力を活用するものであり、農繁期には農業に従事するという労働力利用面で農業との補充関係が認められるが、恒常勤務兼業の場合、農作業の省力化による余剰労働力の恒常的活用という側面はあるものの、多くは労働力利用面で農業と競合的であり、とりわけ夏期を中心に集約的な飼養管理労働を必要とする和牛飼養との関係においてなおさらである。

(3) 和子牛生産と酒造出稼ぎ

(1)、(2)を通じて、温泉町における和子牛生産の概況と、旧来からの兼業機会であった酒造出稼ぎおよび昭和40年代後半以降拡大した恒常的兼業機会の概況とについて述べた。ここでは、この両者が温泉町でいかに関連しあっているかをもう少し立ち入って考察したい。

表4は温泉町のA集落の和牛飼養農家37戸の世帯員の就業状態を示したものである。この表からも分かるように、世帯主が冬期酒造出稼ぎに出(表中「出稼」がそれ)、夏期には稲作と和牛飼養を行う農家が全体の76%を占めている。またこれらの世帯主の年齢は50歳以上がほとんどである。和牛飼養農家の出稼ぎ以外の兼業としては土木建築関係で、これは世帯主が30~40代の場合に限られている。この場合和牛の飼養担当者は祖父、祖母、妻(表中の「農」がそれ)である。婦人層の多くは縫製工場などのパート勤務か内職を行っているが、世帯主が出稼ぎに出る冬期間は、子牛の出産をはじめとした飼養管理の全てをまかされている。

この表からも明らかのように、和牛飼養農家は酒造出稼ぎと密接に結び付いている。またA集落でも1~2頭の飼養農家が圧倒的に多い。ここでは世帯主が伝

表4 和子牛生産農家の就業状態 (A集落)

農家 No	母牛 頭数	家族 数	世帯主		妻		後継ぎ息子			息子の妻			祖父			祖母		
			年令	冬期	夏期	冬期	夏期	真冬	冬期	夏期	真冬	冬期	夏期	真冬	冬期	夏期	真冬	冬期
1	1	2	52	出稼	農・日雇	工場	工場											
2	1	8	65	出稼	農	一	農	○	通勤	通勤	○	通勤	通勤				○	一
3	1	4	60	出稼	農	工場	工場	○	通勤	通勤							○	一
4	1	3	60	出稼	農	内職	農・内職											
5	1	5	41	出稼	農・日雇	内職	農・内職					○	一	一				
6	1	2	55	出稼	農・日雇	工場	工場											
7	1	6	50	出稼	農	工場	工場										○	一
8	2	4	56	出稼	農・日雇	工場	工場											農
9	2	4	59	出稼	農	工場	工場	○	通勤	通勤							○	一
10	2	6	57	出稼	農	一	農	○	通勤	通勤								
11	2	3	46	出稼	農・日雇	内職	農・内職											
12	2	4	62	出稼	農	旅館	農	○	通勤	通勤								
13	2	5	58	出稼	農	内職	農	○	通勤	通勤	○	通勤	通勤					
14	2	2	62	出稼	農・日雇	工場	工場											
15	2	3	53	出稼	農・日雇	一	農	○	通勤	通勤								
16	2	3	55	出稼	農	内職	農・内職											
17	2	5	50	出稼	農・日雇	一	農											
18	2	2	64	出稼	農	内職	農											
19	2	6	44	出稼	農・日雇	工場	工場										○	一
20	2	2	55	出稼	農・日雇	工場	工場											農
21	2	6	43	出稼	農・日雇	工場	工場										○	一
22	2	3	58	出稼	農・日雇	一	農	○	通勤	通勤								
23	2	6	48	出稼	農・日雇	工場	工場										○	一
24	3	6	51	出稼	農・日雇	一	農					○	一	農				
25	3	4	54	出稼	農・日雇	内職	農	○	通勤	通勤							○	一
26	5	5	65	出稼	農	一	農	○	通勤	通勤								
27	7	7	62	出稼	農	一	農	○	通勤	通勤	○	一	一					
28	9	3	59	一	農	一	農	○	出稼	農								
29	1	8	62	土建	農・土建	工場	工場										○	一
30	1	2	64	一	農													
31	1	6	48	土建	農・土建	内職	農・内職					○	一	一				
32	2	7	38	土建	農・土建	工場	工場					○	一	一				
33	2	7	39	土建	農・土建	一	農											
34	2	8	62	一	農	一	農	○	通勤	通勤		内職	内職				○	一
35	2	7	38	土建	土 建	内職	農										○	一
36	4	3	48	通勤	通 勤	工場	工場											
37	5	8	66	一	農	工場	工場	○	土建	土建	○	内職	内職					農

注) 1.聞き取りによる。

2.冬期の就業で「農」と記述されていないが、便宜的に記述していないだけで、在宅者の場合、和牛飼養などの作業は行っている。

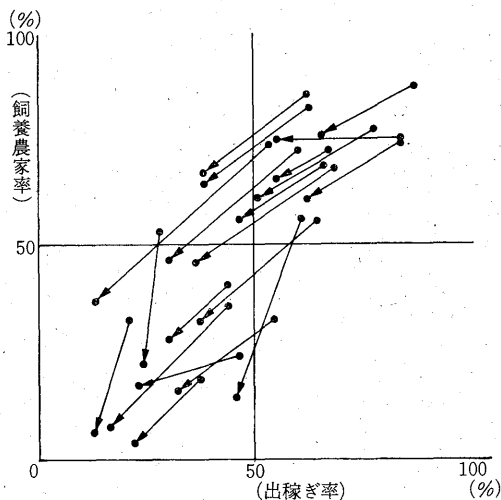
統的な「稲作+和牛+酒造出稼ぎ」を行いつつ、家計の不足分を主婦が域内兼業に出ることで充足していることがわかる。

男子兼業で特徴的なことは、出稼ぎに出ている者のほとんどが50代以上で、30代から40代前半までは土木建築関係に従事していることである。また20代の後継ぎ世代は、都市部に流出している者が多いが、残っている者も多頭飼養農家を除いて全員恒常的な通勤兼業

である。

昭和40年代後半以降の恒常的な兼業機会の増大は、個々の農家に出稼ぎ兼業と通勤兼業の選択を可能とした。温泉町の和子牛生産は酒造出稼ぎと密接に結び付いており、飼養形態そのものも出稼ぎに強く規定された形で歴史的に形成されてきた。その意味で和子牛生産の動向は、労働市場の動向に敏感に反応せざるをえない。図4は昭和45年から10年間の出稼ぎ者率と和牛

図4 昭和45年～昭和55年の飼養農家率と出稼ぎ率の推移



注) 1. 農業集落カードより温泉町32集落中、戸数40戸以上の20集落について作成。

$$2. \text{飼養農家率} = \frac{\text{飼養農家戸数}}{\text{総農家戸数}} \times 100$$

$$\text{出稼ぎ率} = \frac{\text{出稼ぎ者数}}{\text{男子兼業者数}} \times 100$$

3. 出稼ぎ率は、農家戸数で算出すべきであるが、資料の制約から、兼業者数で代用した。

飼養農家率の推移を見たものであるが、この図からも明らかなように、出稼ぎ者比率の減少と飼養農家比率の減少はほとんどパラレルな傾向を示している。昭和40年代後半以降の和牛飼養農家の多様な展開を見る際にも、個々の農家が労働市場、特に出稼ぎに対してどの様に対応しているかという視点が極めて重要である。

3. 飼養頭数別にみた和子牛生産農家の諸特徴

但馬地方で伝統的であった1～2頭飼養の和子牛生産農家は、昭和40年代後半以降戸数は減りつつも、他方多頭化する農家も現れ、現在では飼養頭数規模が多様化している。本項では農家経済の中で農外兼業との関係から和子牛生産経営をどのように位置づけ、いかなる経営目標を設定し、飼養管理を行っているかについて、飼養規模別に分析を行う。

ここでは温泉町の和子牛生産の特徴をよく代表している。

- (1) 1～2頭の伝統的な零細飼養農家層
- (2) 5～6頭の中規模飼養農家層
- (3) 20頭以上の専業的大規模飼養農家層

の3つの階層から典型事例を取り出し、分析を行なう。図5が分析対象事例農家の概要である。

(1) 1～2頭飼養農家層

この階層の農家は、家計の大部分を農外所得に依存している。子牛価格は、子牛の需給動向の変動のほか、子牛の性別、資質の良否による価格差の変動が大きいため、1～2頭規模では子牛販売収入は積極的に家計に組み込まれるものではなく、ボーナスないし臨時収入的な意味合いしか持ち得ない。そのため農家経済に占める位置は低い。

経営目標についても、1～2頭では性別などといった人為的な管理を越えたところで子牛価格が左右されるため、経営目標を設定すること自体が難しい。実際、数年に一度生まれる優秀な子牛をいかに哺育育成し、高価格牛に仕上げるかといった「ギャンブル」的な経営目標の設定が行われている。

飼養管理面では、飼養管理の担い手は酒造出稼ぎを行う中・高齢者であり、冬期出稼ぎ中は留守家族がこれに代わる。飼養形態も伝統的な形態を踏襲し、粗飼料は野草と稲わらが中心で自給部分が多く、かつ畦畔野草採草が稲作の水田管理作業と共通するため、費用意識も明確ではない。技術的には長年の経験から高度なものをもっており、子牛の資質に恵まれればかなりの高価格牛に仕上げる事ができる。

先に指摘した出稼ぎ減少に伴う和牛飼養戸数の減少はこの階層に集中的に起こっている。これらの農家の子弟が通勤兼業者化することによって生じる農業後継者不足問題は、酒造出稼ぎ後継者不足問題と表裏の関係にある。同時にそれは但馬杜氏存続にかかわる問題とともに和牛飼養農家の減少問題でもあるといえる。

(2) 5～6層飼養農家

5～6頭層の農家の多くは、C、D農家のように壮年世帯主の酒造出稼ぎの経験年数がかなり長く、かつある程度の土地基盤を持つ農家に多くみられる。この階層は従来の1～2頭飼養の和子牛生産の伝統的方式では増大する家計費に対処できず、技術的蓄積のある酒造出稼ぎを継続しつつ家計消費の増大分を和子牛部門の拡大で賄おうとしている。そのため所得獲得面で和子牛部門は出稼ぎとともに重要な役割を担うことになり、経営目標は一定額以上の純収益の確保に置かれているとみてよい。しかしこの階層には酒造出稼ぎを行い得る条件があり、かなりまとまった出稼ぎ収入が安定的に保障されているために、1～2頭層の場合のように和子牛部門に「ギャンブル」的要素がある程度

表5 対象事例農家の概要

区分	事例	家族構成		経営耕地		和牛飼養頭数と農外就業の推移 (昭和、年) 45 50 55 60			
		続柄	年齢	地目	面積				
零細飼養農家	A	主人 68 妻 61 長男 26 妻 25 孫 2	水田 65 a 飼料畑 7 普通畑 20	(和牛)(頭) 1 (兼業)主人	1	酒造出稼ぎ	1	公務員	
	B	主人 45 妻 40 祖母 65 長女 18 次女 15	水田 35 a 普通畑 8	(和牛)(頭) 1 (兼業)主人	1	会社員	縫製工場経営	縫製工場	酒造出稼ぎ
中規模飼養農家	C	主人 45 妻 39 祖母 84 長女 18 次男 14	水田 52 a 飼料畑 44 普通畑 5 借入地 10 (田)	(和牛)(頭) 2 (兼業)主人	2	酒造出稼ぎ	4	5	6
	D	主人 47 妻 42 祖母 72 長男 16 次男 14	水田 50 a 飼料畑 40	(和牛)(頭) 2 (兼業)主人	2	酒造出稼ぎ	3	5	6
大規模飼養農家	E	主人 34 妻 28 祖母 66 長男 8 次男 6	水田 35 a 飼料畑 70 借入地 90 (田)	(和牛)(頭) 2-3-5-8-11 (肥育) 10-10 (兼業)主人	2-3-5-8-11	酒造出稼ぎ	12	15	19-20-21
	F(参考)	主人 56 妻 55 長男 28	水田 83 a 飼料畑 17 借入地 20 (田)	(和牛)(頭) 1 (兼業)主人	1	山林労務	3	5-7-8	9

注)聞き取りにより作成。

加味することができる。すなわち、毎年1〜2頭は生産が見込まれる優良な子牛を重点的に仕上げることで、高価格牛の実現を志向するのである。

飼養管理面では壮年世帯主が中心的な担い手で、出稼ぎ中は妻や家族が担当している。C、D農家とも40a程の粗飼料作を行ってはいれるが、依然野草と稲わらが主体である。これは稲作を優先させるため、飼料作を行える土地が条件の悪い転作田などに限られるため、同様な理由で借入地に関しても積極的に借り入れるメリットがないのである。飼料給与も青刈り給与が主で、夏期の野草採取につきこまれる労働量が非常に多く、採草労働の限界がそれ以上の規模拡大を困難にしている。また頭数を増やすと冬期に妻にかかる負担が大きくなり、この面からも規模の拡大は制約され

る。

温泉町の伝統的の和牛飼養形態を前提としても、夏期において男子基幹労働力が1人確保されれば5〜6頭規模までの頭数拡大は可能である。しかしこの階層からさらに規模拡大を行おうとするならば、伝統的形態である「酒造出稼ぎ+和牛+稲作」という経営形態ないし労働力利用構造を改めねばならない。すなわち冬期の飼養管理労働も増大するため、比較的高い収入を得ていた酒造出稼ぎとの両立が困難になり、また和子牛価格の不安定性と規模拡大ともなう投資の増大や技術的な困難を考えると簡単に規模拡大には踏み切れない。酒造出稼ぎと結合した5〜6頭の飼養農家が比較的高い層を形成し、存続している理由はこの点にあるといえるであろう。

(3) 20頭以上飼養農家

20頭以上層の農家の多くはE農家や、参考として記載した大規模飼養経営を志向しているF農家のように、若手後継者によって担われている。多頭化を志す後継者は、従業の出稼ぎに依存することなく農業で自立することを目指しており、和子牛部門は農家経済の中心に位置付けられている。F農家は現在多頭化の途上にあり、多頭化の資金作りとして出稼ぎに出ているが、将来は出稼ぎをやめ和子牛経営で自立する予定である。E農家も昭和40年代は出稼ぎに出ていたが、多頭化による専門的な経営の基礎が確立した時点で出稼ぎをやめている。

和子牛の専門的経営であるため、当然経営目標は純収益の可能な限りの増大と安定である。その純収益も5～6頭層とは異なり、子牛価格の変動に対しても家計を安定的に維持しようものでなければならず、「ギャンブル」的要素を経営に持ち込むわけにはいかない。高価格牛の実現を図りながら、かつ安定した収益を得ることが必要となる。

多頭飼養農家にとっては、多頭飼養を行いつつ高価格牛を実現する高度な飼養技術が求められるとともに、粗飼料基盤の安定的確保が極めて重要な課題となる。温泉町の耕地条件を考えると、域内での借地等による合理的な飼料基盤の拡大は難しい。E農家はそのため鳥取県の平野部で転作田を借り、大規模な粗飼料作を行っている。但馬牛の多頭化を行う場合、繁殖用母牛導入の資金が多額になり、粗飼料基盤確保のための資金が捻出できないといった指摘もされるが¹⁴⁾、零細な土地基盤の温泉町は、多頭化志向農家にとって粗飼料作という面で極めて不利な条件にあると言わねばならない。

多頭飼養農家は出稼ぎに出ることなく、和子牛部門での自立経営を志向している。農家にとって出稼ぎに依存しない農家経済を作りだしたことの意味は大きい。しかしその結果当該農家は従来の伝統的な和子牛生産の形態とは根本的に異なった経営対応が必要となる。特に和子牛販売価格のばらつきを高位平準化しうる飼養管理技術の確立、零細な土地条件を克服して粗飼料基盤を確保するための工夫、財務管理の徹底等解決すべき課題は多い。

本町での専門的経営はまだ行われて日が浅い。F農家のような若手後継者がこれらの課題をどの様に解決し、多頭飼養を定着していくかは、温泉町の和子牛生産の今後の展開にとって注目すべき点である。

4. むすび

温泉町の和子牛生産は労働力利用面では冬期酒造出稼ぎと、また粗飼料基盤の面では稲作と密接に結びついており、伝統的に「酒造出稼ぎ+和牛+稲作」の形態を維持してきた。この伝統的な形態は、昭和40年代後半以降の恒常的兼業機会の増大によって大きく変容していく。とりわけ通勤兼業機会の増大は農業後継者の減少とともに、酒造出稼ぎ後継者をも激減させることになる。そして同じく昭和40年代後半より始まった多頭化の展開も、伝統的に形成された和牛飼養形態の上記の2つの側面からどう脱却できるかという課題対応を基本として進められた。

今日温泉町に存在する零細飼養農家から大規模多頭飼養農家までの多様な飼養規模の農家は、農家経済における和子牛部門の位置付けも、経営目標も、そのもとの飼養管理も各階層によってかなり異なったものとなっている。このような多様化をもたらしたのは、青壮年労働力にとって魅力的な恒常的通勤兼業機会の増大であり、また、個々の農家の世帯主の年齢や酒造出稼ぎ経験、農業経営基盤や和牛飼養技術の強弱等による、多頭化への対応と出稼ぎ兼業との結合形態の多様性であり、さらには若手後継者を中心にみられる基幹男子労働力の出稼ぎをやめて多頭化により専門的自立経営を志向しようとする動きであった。

わが国において、和子牛生産は依然零細飼養が主流であり、多頭化を進めるとしても10頭以下では自立的専門経営の成立は不可能な状態にある。和子牛産地の立地要因を考えるならば、本論で考察した兼業との関わりは今後極めて重要な分析課題といえるだろう。本稿で取り上げた温泉町は、但馬牛産地として特異な地位を占めている。しかし生産立地特性をはじめ、多くの面で伝統的な和子牛産地としての諸特性を備えている。その意味で本稿の温泉町の事例分析は、零細経営存続のメカニズムと規模拡大を可能とする条件の解明に一定の寄与をなすものと考えられる。今後全国の代表的産地との比較研究を通じて和子牛生産経営の存立と発展のメカニズムに関する理論的精緻化を進めていきたい。

注1) 多くの論者が指摘するところであるが、ここでは栗原幸一「肉用牛経営の現状と展望」『農業と経済』第52巻第11号、1986年、10月、32～40頁を参照のこと。

- 2) 宮田育郎『肉牛生産の存立条件』（日本の農業99), 農政調査委員会, 1975年, 18頁.
- 3) 鈴木敏正「水田型肉牛経営の構造」梶井功編『畜産経営と土地利用—総括編』農文協, 1982年, 273~278頁.
- 4) 田代洋一「兼業農家論をめぐる諸問題」『農林金融』Vol. 18, No. 5, 1980年, 296~305頁.
- 5) 温泉町役場資料による.
- 6) 久保佐土美「但馬の農民出稼ぎの研究」『社会政策時報』第177号, 協調会, 1935年, 10頁に昭和8年の美方郡温泉, 村岡両職業紹介所の部門別出稼ぎ者数が掲げられているが, 4,119名の出稼ぎ者数のうち3,798名が酒造業と凍豆腐製造業によって占められている.
- 7) 久保, 前掲書および安田辰馬「但馬出稼母村地帯の農山村事情—労働関係及出稼と同地方における町村組合立職業紹介所の意義(上)(中)(下)」『社会政策時報』第204号~第206号, 1937年.
- 8) 但馬杜氏組合『但馬杜氏』1981年, 73頁.
- 9) 近藤康男『酒造業の経済構造』東大出版会, 1967年, 20頁.
- 10) 杜氏は杜氏補佐, 麴主任, 酒母主任, 蒸米係, 酒母係, 整備係(日当賃金順に記載)の各役職を組織して醸造にあたる.
- 11) 近藤康男, 前掲書, 48~52頁.
- 12) 『昭和61年事業所調査統計調査報告』(都道府県編, 兵庫県), 総務庁統計局, 1987年.
- 13) 温泉町25周年記念誌『過疎を克服しつつ』1979年によると昭和40年代の舗装道路率はわずか5.5%にすぎなかった. 昭和50年以降道路の舗装化が進み, 現在ではすべての集落に舗装道路が通じている.
- 14) 兵庫県・兵庫県農業会議『繁殖と牛地帯における農業後継者の実態と今後の課題—兵庫県下における事例調査研究—』1982年, 21~23頁, 92~115頁などにおいても, 多頭化のための資本投下が畜舎, 母牛に偏り, サイロ等の粗飼料関係には資本投下があまりされていないことが指摘されている.

(筆者・京都大学大学院)